



執筆者

@短信

(テキスト順)

告知

対人援助学会

第3回大会

2011年11月12日 (土)

テーマ

当事者のための連携は できているか？

会場：立命館大学衣笠キャンパス
京都府京都市北区等持院北町 56-1

参加費 事前申込 会員 2,000 円
非会員 2,500 円
当日申込 会員 2,500 円
非会員 3,000 円
事前申込の締切り 9月30日迄

申し込み詳細は学会HPをご覧ください。

<http://humanservices.jp/>

基調講演、シンポジウムでは要約筆記の対応を行います。

ワークショップにおいては、申し込み状況によって対応させていただきますので、事務局までメールで、「第3回対人援助学会大会 要約筆記希望」とお申込み下さい。

事前申込について： 事前申込み用紙
申込用紙に必要事項(氏名・会員区分・所属・住所・連絡先)をご記入の上、
2011年9月30日迄にFAXまたはE-mail、
郵送でお申込をお願いいたします。

尚、参加費は、同日までに下記指定口座にお振込を頂きますようお願い申し上げます。

● ゆうちょ銀行 四一八(ヨンイチハチ)
店 普通預金：3544210 名義：対人援助学会

● □ ゆうちょ銀行の窓口をご利用される場合は、記号：14120

番号：35442101 名義：対人援助学会

※お振込の際、氏名は必ず申込氏名でお願いいたします。(お振込手数料は、各自ご負担をお願いいたします。)

プログラム

10:00-12:00 ポスターセッション

13:30-14:30 ■公開企画

基調講演

「障がい者の就労支援：『企業の倫理』を当事者のキャリアに活かす(仮題)」
秦 政 (NPO 障がい者就業・雇用支援センター理事長)

14:30-16:10 シンポジウム

「障がいのある個人の継続的支援のための地域連携」

◆企画・司会：望月昭 (立命館大学) 朝野浩 (立命館大学)

◆話題提供者：

「学校からみた福祉や企業の連携と情報共有(仮題)」朝野浩 (立命館大学)

「京都におけるこれからのキャリア支援(仮題)」生田一朗 (京都ほっとはあとセンター)

「地域連携、移行にむけた課題(仮題)」

光真坊浩 (厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部障害福祉課)

◎指定討論者：

秦 政 (NPO 障がい者就業・雇用支援センター理事長)

16:20-17:00 会務総会

17:00-18:40 ■ワークショップ

◎理事会企画ワークショップ1

「『対人援助学マガジン』の可能性」

団士郎 (立命館大学)

◎理事会企画ワークショップ2

「IPE教育(専門職連携教育)について」

白井正樹 (神奈川県立保健大学)

柏絵理子 (神奈川県立保健大学)

19:00- レセプション 場所：レストラン

ンカルム (大学衣笠キャンパス内)



◆ 団士郎 ◆

告知

震災復興家族応援 プロジェクト in むつ

9月19日(月)~24日(土)の間、青森県むつ市立図書館ギャラリーで「木陰の物語」の漫画展をします。B全サイズ・カラー版パネル「木陰の物語」が約30点展示されます。

また、9月23日、24日には、家族応援セミナーと題して、本誌執筆者三名が、それぞれ講演やワークショップを実施します。

9月23日

13:00~14:30 団士郎

「木陰の物語の物語」

14:45~16:15 村本邦子

「子育て支援者応援ワークショップ」

9月24日

10:30-12:00 中村正

「父と子の絵本ワークショップ」

お近くの方しか無理でしょうが、良かったらのぞいてみてください。

立命館大学大学院応用人間科学研究科と青森県下北地域県民局の共催です。このイベントは岩手、宮城、福島の被災地でも開催すべく、会場の調整中です。

これとは別ですが、「木陰の物語」—3. 11への記憶—文庫版100頁を1万部作りました。会場でも配布します。

これから長い道のりを、子育てをしなが
ら歩いていく被災地の親御さんへのメッセ
ージのつもりで、一冊一冊丁寧に届けら
れたらと思っています。関心がありましたら
メールで私にお問い合わせ下さい。

danufufu@osk.3web.ne.jp

◆ 藤 信子 ◆

今年の夏は結構長かったような印象な
のは、あちこちで出かけたことが多かった
からなのだろうかと思う。8月初旬に、「ま
だ8月が大分ある」となんとなくほっとした
のは、きっといつもまるで夏休みの宿題に
追われているような気分だからなのだろう
か。明日から出かけて London でグルー
プ・アナリシスのシンポジウムに参加する
けれど、現在の日本は外国ではどのよう
に捉えられているのか、聞けるだろうか
という思いもある。

◆ 水野スウ ◆

東京生まれ。石川県津幡町の住人。週
いちオープンハウス「紅茶の時間」家主。
コミュニケーションワークショップ「ともの時
間」の水先案内人。ミニミニコミ「いのみら
通信」編集人。

この3ヶ月間はあつという間で、とくに後
半、ドトーの日々でした。前号の原稿をも
とに、『いのちの未来と原発と?3.11後のわ
たしたち』という、初心者さんにも実にわ
かりやすい原発問題の小冊子を作ったこ
と。7月には、親しい友の遺した曼荼羅の
ようなキルト「ちきゅう」と一緒に、原発の
おはなし出前でよく旅をしたこと。8月には、
その友のキルトや私たち母娘の作品をな
らべて、銀座の画廊で展覧会を開き(いま
だに信じられないびっくりな出来事)、会場
で原発やキルトのおはなし会や朗読会を
したこと。

娘との、一年がかりの協働制作のブック
レット『贈りものの言葉』も、やっとやっとそ
の間に生まれました。3年前に出した『ほ

め言葉のシャワー』と、二つで一つの、対
になるようなサイドブックです。前作ではき
ちんと伝えきれなかったこと、ほめるって
一体なんだろう、や、doとbelについても、
想いを深めながら綴った作品です。巻末
には、歌になった「贈りものの言葉」のCD
つき。もし興味あるかたは、こちらをのぞ
いてみてくださいませ。

<http://mai-woks.com/>



◆ 山本 菜穂子 ◆

東京都八王子市生まれ。来年1月には
とうとう50の大台に乗る予定。自分の中
では27歳くらいで年齢が止まっている
が。

本編の中にプレゼンでの話を書いたが、
高校は女子校で、演劇部に所属し男役で
舞台に立っていた。コンクールでは審査
委員から「男にしか見えなかった」と絶賛
(?)された経験を持つ。(自慢にならな
い?)

高校時代に「子どもたちの復讐—開成
高校生殺人事件—」というルポを読み、教
員以外の立場で子どもの味方でいたい
と思い、大学で心理学を学んだ。卒業後は
専門学校で数年働き、結婚退職。大学時
代に知り合った夫とは5年間の交際(うち
遠距離恋愛2年)を経て、夫のふるさとで
ある青森県にお嫁にきた。青森に来てか
ら、県職員だった夫のつながりで、児童相
談所で雇い上げの心理判定員として使っ
てもらった。あまり家事の得意でない私に、
夫が、「家にいるより社会に出た方が少し
は世の中の役に立つだろう」と熱心に言う
ので、(♪本当はもっと素敵なことばだった

けれど、秘密♪)公務員試験を受け、28
歳にして何とか県職員になった。採用2年
目から児童相談所に配属になり、児童心
理司、児童福祉司などを経て、続きは本
編へ。

子どもの味方になりたくて、子どもの味
方になることは親の味方になることだと知
り、児童相談所は自分の居場所だと思っ
て仕事をして現在に至る。(私は自分の居
場所だと思っているけれど、児童相談所
側ではお前はいらないと思っているかど
うか、それは知らない。)

青森県の田舎館村在住。これは文字ど
おり「いなかだてむら」と読む。青森のいな
か♪これはなかなか忘れがたいでしょ。

田舎館村は今、「田んぼアート」でちょ
と有名。我が家からは車で3分、役場の隣
のひろ〜い田んぼに黄稲、紫稲、赤米、
黒米など7色の苗で絵を描いている。田
植えから稲が成長し穂が実る、その時期
で絵の雰囲気が変わっていく。しっか
りアート!年々、絵も精密になり。今年
は竹取物語がテーマ。震災から続く様々
な苦しみもかぐや姫が空に持って行っ
たらいいのに。よろしかったらどうぞ、こ
の機会に「東北」にご旅行を。(田舎館村HP
<http://www.vill.inakadate.lg.jp/>
田んぼアートはここからも見られます。

◆ 脇野千恵 ◆

8月初旬、10日間スリランカを旅しまし
た。職場の仲間に、「わざわざ暑い国に行
くの?」と言われましたが、31℃前後でも
湿気がなく、日影に入ると涼しい風が肌
に気持ち良く、実に快適な毎日でした。

今はスリランカですが、私が学生のころ
はセイロンと習った記憶が…。紅茶で有
名ですが、他に香辛料、薬草、カシューナ
ッツなどの産地でもあります。またサファ
イヤなど原石が豊富に採れ、日本人がた
くさん買って帰るそうです。

2年程前までは、タミル人とシンハラ人
との間に内紛があり危険地域でした。国際
的にはあまり取り上げられていませんが、
多くのタミル人が無差別に虐殺されたと聞

きました。日本人に対しては、とても友好的です。内戦中、戦禍をのがれ日本に逃げにやってきたスリランカ人が結構多かったことも、今回の旅で知りました。

2004年のスマトラ沖地震での津波の犠牲者は3万人とも言われています。津波という言葉さえ知らない人達は、海に向かって走っていったとか。

ひと昔前の日本のような人々の生活に、またぜひ訪れてみたい国の一つとなりました。

◆河岸由里子◆ (臨床心理士)

かうんせりんぐるうむ かかし 主宰

子育てのところで、保健師さん達とケース検討をしていると、本当に色々なケースに出会う。先日は、新生児訪問で「犬のウンチはいつまで食べても大丈夫ですか？」と保護者に聞かれたとの話が出た。「普通」に考えれば、「間違っただのウンチを食べちゃっても大丈夫か？」と言うことだろうが、生まれて間もない子どもが、しかもベビーベッドに入っている赤ちゃんが、間違っただのウンチを食べるはずも無い。続けての一言は「6ヶ月までは、母親の免疫があるから大丈夫ですよ？」ときたそう。食べること前提の話？ソコに居合わせたメンバー全員の目が点になったことは言うまでも無い。その話を直接聞いた保健師さんも、なんて言ってよいか分からず、パニックになって、そのことには触れずに帰ってきてしまったとのこと。動物を飼っている家では、子どもが生まれる前から飼っていたからと、動物を優先する家が少なくない。先日の千葉での2歳児の餓死も、父親が猫の方が可愛かったと言ったとか。死んだ犬の名前を子どもにつけた親もいた。しかし、赤ちゃんにウンチを食べさせる話は聞いたことが無い。「普通」は食べないように気をつけるだろう。「普通」が何かも分からない時代なので、仕方ないのか？「常識」と「非常識」もよくわからなくなってきた。このケース、もちろん要注意で経過観察としたが、今後の展開が気になる。

◆岡田隆介◆

近況①: まともな本は最後まで読まず、まじめな映画は寝てしまう。原稿も講演もめんどくさい。旅行も外食もおっくうで、はしゃぐTVにイライラする。1時間以上の会議に我慢できず、スポーツはまるでやる気が起きない。言っておくけど、ウツではない、

近況②: 肉よりも野菜と魚、アルコールよりもヨーグルトと豆乳。横になるとすぐ眠り、体重は維持。仕事は淡々とこなし、おしゃべりはあいかかわらず。努力の自然体だ、念のため。

近況③: 娘が喫茶店でたまたま開いたクーヨン(落合恵子さん主宰クレヨンハウスの月刊育児誌)6月号に、「お父さんの『家族が変わる、子育てが変わる、コミュニケーションのヒント』の書評を発見！」と写メを送ってきた。「ほんまか!? スゴいな」、知っていたけど。

◆木村晃子◆

北海道 当別町 ケアマネジャー

もう一つの連載 ~階段~

脳梗塞で片麻痺が残ってしまった喜男さんの、階段昇降のリハビリ場面にケアマネジャーがやってきて理学療法士に尋ねた。「大丈夫でしょうか？」喜男さんは、理学療法士の方を見た。「何とか、2階までは昇れるでしょう。安全のため、私も一緒に行きますよ。」理学療法士が言った。

ある朝、喜男さん、ケアマネジャー、理学療法士が病院から乗り込んだハイヤーは、喜男さんの住んでいたエレベーターのないアパート前へ到着した。車から降りると、三人は黙って階段に向かった。階段の途中から喜男さんの足はガタガタと震えだした。それでも、三人は2階の部屋を目指して上った。ようやく玄関を開けると、すぐに仏壇のある部屋に入り、両親の遺影を手にした。それを位牌と一緒に風呂敷に包んだ。そして、もう着ることはないであろう古いスーツを箆笥から取り出して荷物の中に入れて。改めて部屋の中を見渡

して、「もう、いいから行こう。」と、ドアに鍵をかけた。三人はゆっくりと慎重に階段を下りた。



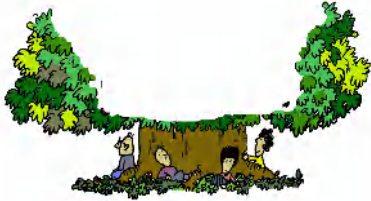
それは理不尽な人生だった。農家の後継者、喜男さんが農業を継ぐ頃には、酒飲みの父親には多額の借金があった。農家をたたみ、都会での勤めで借金を返した頃、両親は続けて病死した。やや遅くに喜男さんが結婚した相手は、年の離れた若い女性だったが、酒が好きで夜はよく遊びにでかけていた。いつの間にか喜男さんの知らないところでの借金が増え、喜男さんが脳梗塞で入院するどころかへ出て行ってしまった。間もなく離婚届も届いた。「貧乏くじばかり」と嘆く喜男さんは、借金の整理を終え、これからは介護施設に入所することに決めた。病気になってから一度も戻っていない自分のアパートへ、部屋を処分する前に必要なものを取りに行ったのだ。

喜男さんが、これから入所する施設へ持って行く物。両親の遺影。そして、もう着ないであろう古いスーツは、かつて妻が喜男さんのために見立ててくれたスーツだと言う。貧乏くじばかり、と嘆いていた喜男さんが、終の住み家に持って行きたかったのは、本当は生活を共にしたかった人たちの思い出なのだろう。

◆村本邦子◆

今、屋久島に来ている。ダイビング、沢登り、縄文杉、温泉、おいしいもの・・・と休暇を満喫中。海中では、戯れるアオウミガメたちのウォッチング。観音崎の地形はダイナミックで楽しめた。今回、一番気に入ったのはキビナゴの赤ちゃんの大群。キラキラキラキラ、まるで輝き踊って誕生を飲み、命を祝福しているかのよう。海の青が濃い。風と潮のにおいも感じ。

沢登りは初めてのチャレンジだったけれど、童心に戻って、1日、はしゃいで楽しんだ。なかなか難しくて、2度ほど滝壺に滑り落ちてしまったけれど、それもまた楽しい。そして今日は縄文杉。年齢を重ねた屋久杉との出会いも感動ながら、道中の緑と光の戯れ、澄んだ水の歌声やさざめきも心地よい。



温泉はやはり尾間。あのヌルヌル感がたまらない。食べ物としては、やっぱりお魚。首折れサバのお刺身、トビウオのから揚げ、お豆腐と屋久いもかな。毎晩、あちこち食べ歩きしている。足がないので、食後は30分から1時間かけて宿まで帰るのだけど、満点の星の下をブラブラ歩くのはこのうえない贅沢。星の光って、何だか私たちにエネルギーを注いでくれているような気がする。

それから、屋久島はお弁当がすごくおいしいのでびっくり。これまで、自分で作るお弁当以外、あまりおいしいと思ったことがなかったのだけど、ここには安くておいしいお弁当屋さんが2軒もある。観光客がみんなお弁当を買って、山や海へ行くので、お弁当屋さんは夜中からせせせとお弁当を作り始めるのだ。

最後に人との出会い。屋久島には一定割合の移住者たちがいるが、今回、出会った人たちがみんなとても賢く有能な人たちであることを発見した。そして、人生の優先順位がきっぱりしている。そうか、賢い人たちは屋久島に来るんだと思った。本当はこんな人たちこそ中央へ行って、政治家になってくれたら良いのだけど。最終日の明日は森にしようか海にしようか。縄文杉の予備日にとってあったが、毎日、快晴で不要になった。1年に370日雨が降ると言われる屋久島だが、晴れ女が3人集まっているので最強。いつもながら、こうしてパソコン持ち込みの休暇だが、十

分にリフレッシュしたぞ～。

◆竹中尚文◆

浄土真宗本願寺派専光寺住職
もう30年以上まえのことになるだろう。団さんからよく芝居に誘われた。“シャンハイ・バンスキング”を見たのも団さんに誘われてのことだった。「竹中、生やぞ！ライブやぞ」と教えられた。本当にその通りだった。昨年、ジェフ・ベックのコンサートは5列目の正面の席だった。身体の全ての細胞をサウンドが通り抜けていく感動は、生涯忘れない。

今年はイーグルスに行った。ジェイク・シマブクロはチケットがとれない。エリック・クラプトンは日程が合わない。

◆北村 真也◆

私塾「アウラ学びの森」(<http://tiseikan.com>)
代表。人間科学修士。

この春、私は無事大学院の修士論文を書き上げることができました。お世話になった先生方、本当にありがとうございます。でも実は在学中の2年間に、論文とは別にエピソードを書き続けていたのです。ふと気がつくと、その量は何と500ページ近くになっていました。「塵も積もれば山となる」。これはこれで、論文とは別の私の財産となりました。そこで今回、先生方からの提案もあって、この書かためたエピソードを構造化していき、何とか本にまとめていこうということになりました。そしてその原稿作りの過程をマガジンに掲載してみることになりました。ということで、今回から新連載の始まりです。

◆川崎二三彦◆

前号のプロフィール欄に続けて呆け日誌をもう一題。

*

何しろ、物を覚えることができなくなった。すぐに忘れてしまう。まず、人が覚えられない。一度出会った人に再会して覚えていないのは当たり前。3回目も駄目で4回目だって怪しい。こうなってくると相手

に申し訳ないので、何とか知っている風を装い、生返事しながら必死で切り抜けようとする。

本当は名刺の裏に、「申し訳ありません、物覚えが悪いため、次に会ったとき失礼があるかも知れませんが、どうぞご容赦ください」と印刷しておきたいのだが、我が職場では裏側に英語バージョンが載っているの、それもかなわない。かつて児童福祉司を拝命していた頃は、「申し訳ありません。多忙につき連絡が滞ることがあるかも知れませんが、その節には遠慮なくお電話ください」という文言を印刷しておこうと真剣に考えたことがあったけれど(さすがにそこまでは踏み切れなかったが)、変われば変わるものである。

*

そんなある日のことだ。年の頃は三十代半ば、通勤途上でいつも通る横浜駅西口、高島屋デパートの前で、しげしげとこちらを眺める女性がいる。が、誰であるかがいっこうにわからない。

「どこで見かけたんやろか」

気になって通りすがりに振り向いた瞬間、思わず目が合ってしまった。何となく気まずい雰囲気を感じ、私は勇気を出して声をかけることにした。

「あのう、失礼ですが、どちらさんでしたでしょうか」

彼女の返事に、ひっくり返ってしまう。

「遊びませんか？」

*

当方、いつのまにか還暦の年の誕生日を迎え、呆け症状が加速している。今後は多くの皆さんに迷惑をかけながら生きるしかない達観しているのだが、かといって悪いことばかりではない。たとえば今後はいつでも映画が千円で見放題。それを糧に、細々と本連載を続けることにしよう。

◆中村周平◆

2011年9月に第7回ラグビーW杯がニュージーランドでおこなわれます。サッカーW杯と同じく4年に一度おこなわれる

ラグビーの祭典…なんですが今ひとつ知名度が低いことが、いちラグビーファンとして残念でなりません。そのW杯、なんと2019年には日本で開催されることが決まっています。8年後、自分は34歳になっています。17歳で怪我をして17年後に日本でW杯が開催される、そんな何かを感じてしまう2019年までに自分の考えや想いを何かの形にしたい、何か行動をおこしたいと今強く思います。日々の忙しさに自分自身が流されないよう、この短信を一つの誓いとして。

◆早樫一男◆

臨床心理コースの大学院生の授業の一コマで、健康家族(ボランティア家族)との面接実習を行いました。院生が面接者となって、家族合同面接を体験するというものです。

そもそもは、京都国際社会福祉センター(KISWEC)の家族療法専門課程において、団先生とともに、長年、実施してきたプログラムです。構造的家族療法の創始者であるS. ミニューチン氏がKISWECで講演した際に、家族面接トレーニングプログラムのアイデアとして伝えたのが始まりです。

将来、臨床心理関連の業務に従事するのなら、個人だけでなく、家族も上手に扱えるようにという思いから、大学院でも授業の一コマとして実施してみました。

協力いただいたのは、孫世代が大学生の三世代6人家族、子育て中の核家族5人、結婚間もないカップルというように、家族のライフサイクル、家族構成もそれぞれ異なる3家族でした。

もちろん、ワンウェイミラーからの観察や録画DVDの振り返りなども実施し、「面接」をさまざまな角度から見直してみるということも行いました。

院生にとっては、緊張あふれた経験とともに、非常に新鮮な経験になったようです。さらに、健康な家族のコミュニケーションにも触れることができた貴重な時間となりました。

健康家族との面接の面白さや大切さ、家族の奥深さについて再発見できた春学期でした。

◆西川友里◆

いくつかの学校で、社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士などの専門職教育に携わっているものです。

最近、通信課程の学生のスクーリングや実習教育にもかなり関わるようになりました。自分の母親くらいの年齢の方や、現場でのキャリアを長年積んできた人に、「私が何を教えるねん！」と自らにツッコみながらやっています。受講生さんから教えてもらうことが多く、ああ私もまだまだだなあと思う一方で、「この専門職とはどういうものなのか、伝えることができるのは、どんなキャリアの方に対して、どんな年配の方に対して、今、この教室では私だけ！」と、自分に言い聞かせてやっております。

授業後に配るコミュニケーションペーパーには、嬉しい事もツツイ事も、沢山書いてくださいます。これを読むのが、楽しみです。

◆中島弘美◆

オフィスのある大阪茶屋町付近は、最近、いろいろな建物ができて、にぎやかになっています。大型書店がオープンしてからは、サラリーマンの姿も多くみられ、これまで、二十代中心の街だったのが、平均年齢が上がっています。

本屋といっても、専門書を見つけるにはこの書店、雑誌を立ち読みするにはここ、なんとなくぶらっとのぞいておもしろい本に出会いたい時は、この店、時間待ちをするときに便利な本屋と、目的別に利用できるのもうれしいところ。

雑貨店、カフェなどもおおく、ウインドウショッピングには、もってこいですが、私が喜んでいるのは、大阪駅が新しくなって、周囲のお店も改装続きでデパ地下が充実したこと。毎日、食いしん坊が止まりません。

◆千葉晃央◆

ある方から、半身まひの友人の家に行った話をきいた。そこのお部屋には、大きなざらがあり、天井から複数ぶら下がっていたそうだ。半身まひの方の場合、お札で買い物はしやすいけども、硬貨ではしにくい。なので、家に小銭が貯まるということ、後になって気づいたそうだ。

私も思い出した。半身麻痺だった祖父。会うとよく、溜まった貯金箱複数をあけて、なかに入っている金額当てゲーム。一番近い人が何割…など、分け前を決めてって、博打風であまり好きでなかった。けれども、そういうことだったのか。秋田と関西で年に多くて2回しか会えない。そんな孫にその小銭…だったのか！私と祖父は、関係断絶中に、祖父は亡くなりました。あれから数年。俺わかってなかったなあ(涙)



◆尾上明代◆

先月、新刊を出版しました。

「子どもの心が癒され成長するドラマセラピー」戎光祥出版

この本は、教師など子どもに関わる指導者たちが実施できるように、私が創った「受容とミラーリングの即興ドラマ」(このマガジンの連載で扱っているドラマ手法)の方法・注意点を詳述しています。そして、どのように導いていくかを理解できると、「日常場面での」子どもへの対応力もつくようになると思います。

また、ドラマセラピーの神髄を理解できる点では、DT 必須のバイブルとも言えます。

この本の対象は教育現場、子どもです。しかし、すべての心理療法に従事している方々にとっても、役立つものとなっている

ます。セラピーや対人援助を行う際に大切な考察と方法を、豊富なケース解説の中で述べているからです。専門的なことを、わかりやすく説明しているので、自信をもってお勧めします！

アマゾンの生徒指導というカテゴリーで、かなりの期間「過去90日間で一番売れた本」となっていて、ちょっと驚きました。特に専門家の方々からは、2章に大きく反応して多くの感想を頂きました。

もしお読みいただければ嬉しいです。

◆ 三野宏治 ◆

今年の春から秋田県に住んでいます。3月末に京都から越してきたのですが、その頃はまだ節電で町中が暗く雪が残っていて「色のないところだな」と思っていました。春になり夏を迎え今秋田は色鮮やかです。ただ、大阪生まれ大阪育ちのものとしては、少しスモッグがあって押しの強い関西が懐かしい今日この頃でもあります。

小さい頃、両親や祖父母に「遍照金剛言いなさんな」とよく叱られました。「遍照金剛言う」とはグダグダ屁理屈を言うことで、私には懐かしい言葉です。ホームシックな精神状態と変わらぬ「屁理屈こき」加減からこのようなタイトルにしてみました。

◆ 浦田雅夫 ◆

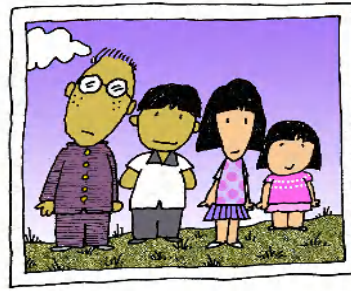
被災地に行き活動した人たちが多くに語っている一方で、被災地に行っていない人、とくに援助に関わる仕事人たちが恐縮している。行く人が善で行かない人が悪ではないのに、非国民的なプレッシャーを感じている人もいます。

粉骨碎身ボランティア活動を行った人たちが心から尊敬するが、一方、行かない、行けない人たちの語りにも耳を傾けたい。

◆ 中村 正 ◆

NHKに就職してディレクターとして活躍する教え子の二人から期せずして「番組つくった」と連絡があった。北海道の釧路放送局にいる彼の番組は、東日本大震災の後に北海道の浜辺に漂着した様々なも

のとその片づけ場面から思いを馳せるという主旨の内容だった。



もうひとり甲府放送局に勤める卒業生。視覚障害者向けの読む絵本の取り組みである。自分がナレーションをしてその絵本を読んでいる。NHKに就職するに際して、ステレオタイプな思考と表現のあるところから自由(自分の表現したいこと)に振る舞えるかが大事ではないかと話したことがある。不自由だからこそ何かをその枠のなかで目一杯に言えるのかが問われることになる。今回の連載の中身も同じで、「柵」のなかで何ができるのか、「柵」に気づくこと、どんな新しい「柵」があればいいのか、「柵」はなくてもいいのか、もちろん場合によっては古い「柵」は壊した方がいいし、いつまでもその中に入る必要もないが、そこで納得のいくまでやってみることも次の行動には役立つとも話した。いつも同じことを考えているなと思いつつながら、教え子たちの活躍を想像していた。連載に記したようにこの夏は別の意味で忙しく、同じように点として日々の時間が流れるが、夏休みだったので、点を結ぶ線の異なりがあり、新発見なのか再確認なのか分からないが面白かった。映画や演劇(能も観た)もたくさん楽しむことができた。暑気払いと称したおしゃべりもたくさんあった。ただ残念なことは、編集長の団さんとはいつも長時間二人きりでおしゃべりすることにしている長期休暇の恒例が、ことしはまだ実現できていないことだ。なんとか秋の開講までには実現したいと思っている。

◆ 荒木晃子 ◆

生殖医療施設 & 精神科診療所心理士。立命

館グローバル・イノベーション研究機構客員研究員。

「父」毎年この時期、お盆をはさんで思うことがある。約5年前に亡くなった父のことだ。父は大正14年2月生まれ。第二次世界大戦では、海軍航空隊(特攻隊)に所属、つまりゼロ戦に乗っていた。特攻隊の最年少兵として、終戦直前まで自らの出撃を、いまか、いまかと待っていたという。「終戦があと1週間遅かったら、アッコは産まれてなかったんだよ」戦争の話をするたび、終わりにはそうやって小さな娘を困らせた。ちょっと意地悪で陽気な父だった。いつも、娘に向かって、娘自慢をする父だった。そして最後に言うことばは決まって同じ。「アッコは、お父さんとお母さんのいいところばかり似ているね」。それを言われるたびに、小さな私は、体をよじって喜んでた。母は隣で笑っていた。三人家族のいつもの風景。私のおしゃべり好きは、きっと父親似なんだね。そんな平穏な日々のなか、たくさんおしゃべりすることに、娘はすすくと育っていった。「人間はね、平凡が一番難しいんだ。何事も起こらない人生なんてないんだよ。だから、何が起きても、くじけてはいけない。頑張っていれば、それだけでいいんだよ」忘れはしない父のことば。父からもらったおくりもの。お父さん、娘はいまも、母と一緒にがんばっています。

2011年夏自宅にて

◆ 団 遊 ◆

アソブロック株式会社、有現会社 ea 代表、「家族と子どもを想う出版社」ホンブロッック発行人。立命館アジア太平洋大学非常勤教師(キャリア教育)環境に変化と刺激を起こすものづくりをモットーに、地域活性から企業ブランディングまで幅広くプロデュース。「団士郎家族理解ワークショップ(東京)」を隔月主宰(偶数月第二土曜日)。<http://danasobu.com>

マガジン締切間際の今日も(8/25←まだ執筆中……)、テレビでは世界柔道が放送されています。毎夜毎夜「たくさん選

手があるなあ」「ルーマニアで柔道をしようと思うってどういう人？」など、勝負とは別の感想も持ちますが、楽しんでます。

まだ結果は出てませんが、100kg 超級に鈴木桂治選手が登場します。以前、彼と話をしたことがあります。そのとき「柔道で日本代表になるということは、金メダルを義務付けられるということです。銀以下はすべて敗北の一括りです」と言っていました。北京五輪の前でした。

ところが、旗手もつとめたその地で、彼は一回戦負けをしました。当時の話し振りから「きつと辞めるだろうな」と思っていました。しかし、彼はその後の屈辱を乗り越え、世界柔道に帰ってきました。目指すは来年のロンドンです。

どれだけ頑張っても、上手く行かないことの方が多い。雨のように降り注いでくる上手く行かないこととどう付き合うか、その付き合い方のバリエーションを、彼の姿からも学ばないと、と思っています。

そんなことを思いながら、なんとか彼に金メダルを！と願います。きつと当日はテレビを見る眼にも力が入るでしょう。どうか、彼が思いきった柔道をできますように。

◆ 鶴谷圭一 ◆

夏休み、一週間休暇をとって古い友人夫婦と3人で宮崎、鹿児島へ「波乗りツアー」に行ってきました。今回は大阪まで車で行ってフェリーに乗り、九州を走り回り、またフェリーに乗って大阪経由で静岡まで帰ってきました。

宿は予約せずに、波まかせで移動して、日中は海に入っているか、移動をしているか、車の中で昼寝をしているか…そして夕方頃にビジネスホテルのフロントを尋ねますが、その度に、ホテルマンから品定めをするようにジロジロ見られるのです。ビーチサンダル履きでヨレヨレのTシャツを着た日焼けと無精ヒゲのオッサンがリュックしょって「今夜部屋空いてますか？」とやってくるのですから、警戒するのも当たり前かな。

こんなことを 20 歳代から 20 年以上続

けています。体力は年々落ちてきますが、気持ちだけは 20 代が蘇ってくるツアーなのです。

車は 16 年乗って 16 万キロ走っている国産ワンボックス。もうかなりオンボロですが、一番困ったのはカーナビも 16 年前のもの。新しい道路は表示しないし、長いルート検索はフリーズするし、ナビに慣れてしまったこの頃はナビが機能しないとえらく不安になるもんだと実感しました。大阪の環状線は3周もしてしまいました。

◆ サトウタツヤ ◆

エッセイは暇があるときに書かれないと、ダメだなあと反省した次第。今回も締め切り5日遅れで、2011年8月30日の出来事を書かせてもらいました。8月31日には、カリフォルニア大学・ファンダー (David Funder) 教授が来日。日本が初めてのことなので、金閣寺や竜安寺にでかける予定です。

◆ 大野 睦 ◆

大阪生まれ。日本福祉大学社会福祉学部卒業。屋久島でネイチャーガイドという職を通して多くの方とネイティブ (自然や人が持つ本来の) ビジョン (視点や考え方) を共有したいとエコツアー会社、有限会社ネイティブビジョン設立。

BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net>

先日、日本で10年ぶりとなる青年会議所 (JC) を屋久島に設立し、副理事長に就任。青年会議所は必ず40歳で引退します。つまり、私の場合早速ですが、賞味期限が短い。だからこそ、やりきれない！そんな気がして何でもやる、という思いです。私たちが考えているほど簡単にはいかないこともずっとずっと大変なこと。これから身に沁みしてくるでしょうね。

◆ 坊 隆史 ◆

最近、日本の新幹線の技術提供を受けた国の高速鉄道が“独自の技術”として商用化しようとする動きがあるなど、模倣

を超えた知的財産の「パクリ」が問題となっているのはご周知のとおりです。もともとヒトは観察学習や模倣を繰り返して様々なスキルを獲得していく動物であり、良質な文化の模倣はある程度は仕方ないかとも思いきや、なんと今回本文で取り上げた講座企画が、複数の他自治体主催の講座でインスパイア (マイルドなパクリと理解してほしい) されていると耳にしました。

早速ネットで調べてみると、ヒジョーに似ているがビミョーに異なるタイトルの講座の受付がされているではないですか。技術者の知の集大成である新幹線や国民的な大ヒットマンガならともかく、私たちがのような駆け出し援助者が試行錯誤でやっている講座がインスパイアされるものだからただただ驚きです。関西人らしいダジャレを効かせたタイトルとリード文が刺激的だったのでしょうか？自分たちが企画したものが注目されている光栄さと「断らないから一言連絡くれてもいいやん」という苦々しい思いが交錯しました。なんだか変な気持ちです。

しかしここで気になるのはインスパイアされている講座の講師たちが私たちの講座に参加していないこと。何を話しているんだろう？これらの講座を自分が受講してインスパイアされたものをパクリ返すとどうなるんだろう？あれこれ想像をめぐらす今日この頃です。



プロフィール欄のURLから、執筆者それぞれの発信に飛びます。Ctrl キーを押しながら、クリックしてください。